

特別講演 要旨

自己保存の反応に基づいた行動の学習から自分の考えに基づいた社会的行動の学習まで
～情動報酬系 へのアプローチ～

藤田医科大学保健衛生学部リハビリテーション学科理学療法専攻
客員教授 富田昌夫

動作の学習を考えると、“基本動作と日常動作の学習の仕方は全く別”であると考え。基本動作は系統発生（個体の発達）的な、すべての人に共通した自己組織化による学習の仕方をするのに対し、日常動作は個体の意図に基づいた、意識的で個人差の多い学習の仕方をする。

学習はまず初めに、半ば自律的に、安全安心に基本動作をできるようにして、それを使って日常動作や社会的動作を学習するという階層構造になっている。社会的行動の拡大とともに大脳皮質を中心とした認知系（高次脳機能）が発達し、脳幹部や大脳基底核など情動報酬系の機能の連携が極めて重要になる。

人は情動報酬系の機能が非常に複雑に、繊細に発達し、自分の考えを作り、その考えに基づいて、本能や自己保存の反応で引き起こされる情動的な行動をコントロールできる。今回は情動報酬系と高次脳機能との関連付けに踏み込んで、高次脳機能障害のアプローチにまで言及できればと考えている。